



「ひらほく新聞」で検索！
★ホームページ・ひらほくランド★
http://www.hirahoku.com/
☆バックナンバー含め「ひらほく新聞」を
閲覧・ダウンロード可能です！

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

子どもたちが人生を生きるまで



10月21日、仕事の基礎になる人格を高める講演会、人間力大学10月定期講演に参加。講師は「まゆみ先生」の愛称で全国を飛び回る、愛と感動溢れる熱い福岡の小学校教志・香葉村真由美先生。講演のタイトルは『子どもたちのいのちから教えてもらったこと』愛でしか人は愛われない。』。実際にこれまで出会った子どもたちとの「いのちの授業」からの数々の教えに、会場は感動の嵐、終始多くの人たちの涙を誘っていました。

まゆみ先生は、子どもたちのいのちから教えてもらったという三つの大切なことをずっと伝え続けています。一つ目は「いのちの大切さ」。自分も毎年の中学二年生の職場体験受け入れの際にこのお話を伝えていきます。

自分を生んでくれた両親、そして両方の祖父母、さらに…宇宙の始まりからこのいのちは続いている。数え切れないご先祖様の誰一人欠けても自分は生まれてきていない。だから、自分のいのちはご先祖様のいのちでもある。自分の身体の中にたくさんのご先祖様のいのちが宿っているから、お父さん、お母さんに感謝して、ご先祖様を悲しませるようなことはしないよう、いのちを大切に大切に生きていこう。

二つ目は「自分を信じる力」。まゆみ先生は、人間力大学の大嶋啓介理事長の居酒屋でつべんの『本気の朝礼』に出会い、子どもたちと元気な大きな声で挨拶、キラキラ輝く夢を言葉にする『キラキラ朝礼』を毎日やるようになりました。大人になって人生で壁にぶつかった時、自分を信じて乗り越えられるように、「あなたならできる、必ずできるよ！」って伝え続けています。この朝礼は賛否あるようですが、動画にあがっています。
【世界一の朝礼】で検索

三つ目は「愛を持って生きていく」ということ。「愛でしか人は愛されない」の思いに至った子どもたちとの数々の感動物語から、原点ともいえるエピソードを以下にご紹介します。

サヤカの分まで人生を生きよう

私は今では「自分を信じる力」や「いのちの大切さ」を子どもたちに伝えていますが、最初からそんな教師ではありませんでした。

私は先生になりたくて先生になりました。そして自分の先生像に子どもたちを押し込めて、何事も上から押しつける先生でした。

けれどもたった一人の少女が、「先生、それは違うよ」って教えてくれました。

その子の名前はサヤカ、私が小学校教師になって初めて担任した女の子でした。彼女とは以来ずっとお付き合いがあり、卒業後も何度か会っていました。

ある冬の日でした。大阪で働いているはずの23歳のサヤカが久しぶりに私に会いに来てくれました。しかし、驚いたことにとっても痩せていて、手首のリストカットの痕を見つけた時は本当にビックリしました。彼女は思い切っって自分の人生を話してくれました。大阪で一生懸命働いて、大好きな人ができて一緒に暮らした。そして赤ちゃんが出来た。でもそれを告げると彼はいなくなりました。悲しみのなか、たった一人

で福岡に戻ってきた。けれど、周りから反対されて大切な赤ちゃんを墮ろした。そんな失望のどん底でリストカットを繰り返すようになった。

けれども、ただ一人、守ってくれるお兄ちゃんと呼べる人ができた。お兄ちゃんには彼女がリストカットをしたくなると、彼女のもとへ走って駆けつけてくれた。そしてある日、夜中にリストカットしたくなり、お兄ちゃんに電話。「わかっただけ！待っているんだぞ」というお兄ちゃんの声を聞いて電話を切った。けれども、お兄ちゃんは朝まで待っても、サヤカのところへは来なかった。次の日サヤカは、そのお兄ちゃんがサヤカのところへ来る途中でダンブカーに轢かれて亡くなったことを知る。

私と関わる人はみんな不幸になる…。彼女は今度はお兄さんの薬を飲むようになった。そんな時に私のところへ来たのです。

私は大好きだったサヤカがどうしてそんな悲しい人生を歩まなければいけないのかと、悲しくて、辛くて、その悲しみをすべて彼女にぶつけてしまいました。「頑張るんだよ、サヤカ、命は一つしかないんだよ。頑張って生きていくんだよ！頑張らなきゃ」

「分かってるよ、先生。私、分かってる。頑張る」。そして別れ際、私はもう一度、言いました。「サヤカ、頑張るんだよ」。

けれども二、三日して、私の元に悲しい知らせが届きました。サヤカが大量の薬を服用して、たった一人で自らの命を絶ったと…。ビックリしてサヤカの家に行きました。するとお母さんが私に「先生、先生はサヤカに何て言ったんですか？サヤカが最後に会ったのは先生だったんですよ」。そう言われました。

それを聞いた時私は彼女に何てことを言ってしまったんだろうと、頭をハンマーで殴られたような気がしました。きつと彼女は、あんな頑張るって言葉を聞きたくて私に会いに来たんじゃない。自分をこんなに傷つけても、こんなに薬を飲み続けても、それでも生きてきた自分をただ褒めてほしかったに違いない。「よく生きてきたね」って、私に言っただけなのに違いない。にもかかわらず、私は彼女の手の傷は見えても、心の傷は見るのができなかつた…。

私は、子どもたちを幸せにしたいと思いき先生になりました。けれどもサインを鳴らして私のところへやっ

て来た生徒を救うことができませんでした。この時から私は自分を責めて責めて責め続け、心の病気になるていきました。

夏休み、真っ暗い部屋にこもり、自分で起き上がることもできないほどになっていました。そして、教師としてのみならず、人間としての自信も失いかけていたそんな時、毎日そばに寄り添ってくれたのが、娘でした。何とかしなければと苦しむ私に娘は、こう言うてくれました。「起き上がらなくてもいい、ただ生きていてくれるだけでいいから」。

その言葉を聞いたとき、私は全身の力が抜けたように声をあげて泣きました。「ただ生きていてくれるだけでいいから」。私がサヤカにかけてあげられなかった言葉でした。

私はもう一度、起き上がるうと思いました。そして今度は子どもたちに「あなたたちのいのちは、生きていくだけで素晴らしいんだよ。あなたたちは、生きていくだけで価値があるんだよ」。って、そう言っただけで教師になろうって心から思いました。その時から私の教える内容は180度変わりました。亡くなったサヤカの分まで人生を生きようと決めた瞬間でした。(終わり)

闘魂

十里の旅の第一歩
百里の旅の第一歩
同じ一歩でも覚悟がちがう

三笠山にのぼる第一歩
富士山にのぼる第一歩
同じ一歩でも覚悟がちがう
どこまで行くつもりか
どこまで登るつもりか
目標がその日その日を
支配する

どこまで行きどこまで登るか、目標の高低が闘魂の度を決める。

人間学を学ぶ月刊誌『致知』
2016年11月号特集より

2013年7月号で紹介
介の人生学習塾「格闘塾」
塾長とやさんが最重要基本
として教えている修身、
『我勝道』

『我勝道』

この人もまた、生涯を燃えて生きた人、平澤興氏の言葉。
「一言で言えば、人生とは自己との対決だ、自分の勝負だと、私はそう思います。本当にひとりの人間として自分と競争をして、自分との勝負に勝てる人、これがやっぱり人間として立派な人間、人間として一番立派な生き方ではないか」

「新聞週間」

さだまさし

報道の使命と責任を再認識しようという趣旨で戦後に始まったのが新聞週間（10月15日～21日）だ。僕は新聞好きなので、

宿泊するホテルでも搭乗した飛行機でも、読売・朝日

・毎日のいわゆる3紙と地方紙は必ずリクエストする。僕の読み方はこうだ。まず1面の見出しが各紙同じであれば「事件」だ、と緊張し、見出しが異なった場合は「安穩」と安心する。それから朝日の天声人語、毎日の余録、読売の編集手帳、それに地方紙のコラムを読み比べて順位を決める。そして社会面を読み、次にその右側のページの第2社会面を読む。実はこの第2社会面に各新聞社の本性がにじむことが多いように思える。ここに新人や窓際の記者が担当した記事が載ることが多いと聞いたことがあるからだ。その後に入

ポーツ欄に移り、それから国際面に移る。後はゆるゆるともう一度1ページ目から読み進むことにする。

読んで思うことはその情報量の豊富さだ。殊に新聞は冷静、客観的、俯瞰的な視点を求められるだけでなく、それを正確に検証することまで求められるものだ。世間には、速いということもあってインターネットの情報があふれているが、その正確さが脆弱で、デマゴグすれすれの不誠実な情報が満ちていることに、へきえきする。

放送などのメディアと新聞の一番違つところは幾度も読み返せること。つまり幾度も読み返すに足る正確

で豊富な情報が求められるのだ。頑張っている新聞記者を何人も知っているから、新聞が売れないと聞く

と新聞好きには寂しく、頑張れ新聞、と思わず叫ぶのである。
(シンガー・ソングライター、小説家) 10月16日付
神奈川新聞・日曜コラム
「風のうた」より

毎日の新聞習慣がこれまでの素晴らしい日本の国力、日本文化を育み続けてきた。しかし、危惧される

近年の活字離れに、急進したスマホ社会の現状が更に拍車をかけ、今後、子どもたちのために、より一層に心の健康、栄養が求められる時代となっていく。

東急電鉄の、ある車内広告に、賛否の嵐が起こつているといふブログを見た。「都会の女はみんなキレイだ。でも時々みっともないんだ。」というキャッチコピーがあり、下に「車内での化粧はご遠慮ください。」という広告。
電車は、公共交通機関であり「公」、化粧は家の中でする「私」。「どこがマナー違反か分からない」という否定的な意見の人は、公私混同に気づけない人であり、多くはあまり読書もしていないのでは、とのこと。
10月27日は「文字・活字文化の日」、そしてその

日から「秋の読書週間」だった。文部科学省はこの夏、学校図書館に複数の新聞を配備すべきだとする指針を打ち出した。子どもたちが活字に親しむ習慣づくりをいかにつくっていくか。ポケモンGOほどに新聞や本に夢中になれるような秘策はないものか・・・

語り継がれる「声」

インターネットがなかった頃、SNSのような役割を果たしていたのが新聞の投書欄。朝日新聞で「声」として続く投稿欄ができて

まもなく100年。過去を振り返り特に話題となった投稿が紹介されています。じつは過去に採用された中には、文豪や政治家、俳優など著名人もたくさんおり、最近では一般の人にもまして紙面掲載された内容が、ネットを巻き込んで盛り上がることもあるそうです。

25年前から、今なお読者に語り継がれている「声」があります。1991年1月17日、米軍を中心とする多国籍軍がイラクを空爆した湾岸戦争。その翌月の2月7日、当時31歳で急性骨髄性白血病で闘病中の俳優・渡辺謙さんの投書が紙面に載りました。次にご紹介します。

『命の大切さを私は訴えたい』

私は数十人の医療スタッフの力を借りながら自分の命と向かい合っています。湾岸戦争は本格的な地上戦へと移行しそうな状況ですが、家庭に送られて来る膨大な映像や情報を見聞きして、「命のやりとり」という真実はやはり薄れがちです。

戦争をめぐって使われる人道的な援助という美しい言葉の裏には何かかペルシヤ湾に日の丸をはためかせなければ格好がつかないという思惑しか、私には、見えてきません。この豊かさを享受したいなら、という脅迫めいた言葉も、人と人が殺し合う現実を、肯定しうるものではありません。

百万人もの兵士が命のやりとりをしようとしているのを、外野席で応援する気には、私はどうしてもなれません。なぜ、政府は人殺しはよくないことですが、と声を大にして言えないのでしょうか。何十万人も死者を出しあつて、それが国益につながるなどは、どんな論理を積み重ねても人を納得させることは出来ません。

こんなことは、政府は言えないのですから、日本人として声を大にして全世界に呼びかけるべきです。どんな正義の名目をかかげても、戦争は人殺しです。その

の当たり前のことを、たった一つの命と向かい合っている者として訴えます。
(出典1991年2月7日、朝日新聞東京本社版「声」)

編集後記

フェイスブック新潟県人会は今や登録が一万一千人超、日本一の規模とのこと。三年ぶりに都内でのイベントに参加、新潟料理や日本酒を楽しみ、方言や習慣の話題で大盛り上がりでした。40名近い参加者で、9割近くが初対面というなかで、あれだけすぐに意気投合できるというのは、まさに格別な「郷土愛」。有難く大切にしていきたいと実感しました。

18歳で新潟から上京、現在在任の座間市には23年。最後に手前みそになります。が、地元ネタをひとつ。

10月20日、座間にヒーローが誕生。小さい頃からよく知る近所の大江竜聖君(二松學舎大学付属高等学校3年)が、ドラフト会議で我が読売巨人軍から見事6位指名に。二度の甲子園出場での活躍など、掲載新聞をパウチしてお届けしたりしてきましたが、最幸に嬉しいニュースでした。
感動の父子物語が「郷土愛」で語り継がれていく活躍を大いに期待します。